

令和二年度

岡山白陵高等学校入学試験問題

国語

| | |
|----------|--|
| 受験 番号 | |
|----------|--|

注意

- 一、時間は六〇分で一〇〇点満点です。
- 二、問題用紙と解答用紙の両方に受験番号を記入しなさい。
- 三、開始の合図があつたら、まず問題が一ページから二五ページまで、順になっているかどうかを確かめなさい。
- 四、解答は解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 五、字数制限のあるものについては、句読点も一字に数えます。

□
次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

科学者でない人が、科学にリアリティーを感じないのは、よく考えれば当たり前の話であって、リアリティーを感じる方がむしろおかしい。魚釣りをしたことがない人は、釣りにリアリティーを感じないだろうし、自動車の運転をしたことのない人は、運転にリアリティーを感じるわけがない。昔はリアリティーを感じていたのだとすれば、騙だまされていたか、何か特別な理由があったに違いない。

山梨大と山梨医大合併の景気づけのイベントとして、ノーベル化学賞をとった (注1) 白川英樹（注1）氏の講演会を計画したところ、聴衆が不足ぎみなので、講義の際に学生を (注2) カンユウ（注2）してくれまいか、と当局から頼まれた。一般の人も学生も、大抵はビートたけしの講演なら聴きたくとも白川英樹の講演には余り魅力を感じないのだろう。第一、学生の大半は白川英樹を知らない。私たちが学生の頃、湯川秀樹（注3）や朝永振一郎（注3）を知らない奴（注4）はモグリだった。中間子理論やくり込み理論を本当に理解している者は、ほとんどいなかっただろうけれど、皆、理解できるふりぐらいはしたいと思っていたのである。

知への畏れと憧れが残っていた時代、知の最先端を体現している科学者（や思想家や文学者）は多少とも畏怖の対象であった。人々は、偉い学者を生身で見てオーラを感じたいと思って講演会にやってきたのだろう。科学の最先端の理論など、当時の人にだって実のところほとんど理解不能だったことに違いはない。違っていたのはスノビズムの有無である。

「スノビズム」を手元にある三省堂の大辞林で引くと、教養人を気どる俗物根性、とある。教養人は皆にほめたたえられるはずだ、という前提があってはじめてスノビズムは成立する。今や教養人になったところでだれもほめてくれそうにない。これではスノビズムは消滅するより仕方がない。学生の大半は、金持ちになりたい、安楽に暮らしたい、美人になりたい、有名人になりたい、とは思っても、教養人になりたいなどは露ほども思っていないようだ。

科学者や教養人が尊敬された時代、学生たちの多くは、自分もまたその一員になれる日のことを一瞬ぐらいは夢みたことがあつたらう。科学と私は願望という糸で繋がっていたわけだ。この文脈においては、科学へのリアリティー

は憧れという形で担保されていたと言える。話が少し横道にそれるが、本が売れなくなったのもまた、スノビズムの消滅と⑤キを一にする。私はこの話を最初、文芸評論家の川村二郎かわむらじろうから聞いて、いたく納得した覚えがある。一昔前の学生は、少し背伸びしてでも難しい本を読もうとしたものだ。知への好奇心がかけらほどはあった。ヘンな言い方だけれども、それが健全なスノビズムに支えられていたことは確かだろう。最初はスノビズムでも見栄みえでもよい。わからないものをわからないながら読んでいくうちに、ある時何となくわかるようになり、知識の獲得が快感になってくる。そうして人は、スノビズムを脱却して知の愛好者になっていくのだ。

スノビズムが消滅した今となっては、若い人たちが難しい本を読む動機がない。若者はハウツー本しか読まなかった。あまつさえ、小学校から大学に至るまで、わかる授業をしなさい、というバカげた圧力が満ち満ちているこの国で、大半の若者はバカになるより他にいかなる選択肢もないようにみえる。人は自分で悟る以外は、あらかじめわかることしかわからないのだから、わかる授業しかするな、ということは、難しいことは教えるな、というに等しい。難しいことを易しく教えることは本当はできない。易しく言えるのであれば、それは難しいことではなく易しいことであろう。屁理屈へりくつを言っていると言うな。世の中には難しいコトバでしか説明できないことが確かにあるのだ。たとえば、微分方程式を数式を使わずに易しいコトバで解くことは難しい。難しいことを易しいコトバで言い換えて理解することは実はとつても難しい。難しいことは難しいままに悟る他はないのだ。

話を元に戻す。一般の人が科学にリアリティーを感じなくなった今ひとつの原因は、科学技術が余りにも身近なものになってしまった結果、人々は科学に有難みを感じなくなったことであろう。②私たちの世代（私は一九四七年の生まれだ）までは、科学の恩恵に浴したという経験が多かった日本人に共有されていたような気がする。私が小学生の頃、風呂は石炭で焚たいていた。便所は汲み取り式くみとりしきだった。電話も電気冷蔵庫も、電気洗濯機も自動車もテレビも、私の家にはなかった。それが、中学生になる頃には、自動車こそなかったけれど、風呂はガス釜になり、テレビをはじめとする一通りの電気製品も電話も備わったのだから、その間の変化はAであった。子供心にもそう思ったぐらいである。毎日家事をしていた母親にとっては、ほとんど革命であろう。世の中、本当に便利になった。難しいことはわからないが、科学の力は大了なものだ。この世代の人々は、こういった形で、科学にリアリティーを感じていたはずだ。

余談ではあるが、今のお年寄りが無闇に医者好きなのも、科学信仰と関係があると思う。病院に行っても行かなくても、老人の病気が急によくなったり悪くなったりするとも思えない。私ならば、その時間を、もう少し有意義なことに使ったほうがいいんじゃないかと思うけれども、毎日、病院に通うのが生きがいでもあるかのような老人を見てみると、人の考えはさまざまであると思う他はない。毎日、お稲荷いなりさんを拝みに行っているのと同じだと思えばいいわけか。

さて、^③私よりずっと年下の若者たちはどうなったかというところ、ものごとこついた時から、すでに沢山の電気製品に囲まれていた。科学技術は前提であつて、とりたてて有難いものでもなくなった。石炭の風呂などは知らない若者も多い。汲み取り式の便所では用を足せない。今の老人たちが、便利になつたと^④カントンカントンした世の中は、余りにも当たり前すぎて有難みを感じるどころではないのだ。飢えて死になつたことのない人に、食い物の有難みがわからないのと同じであろう。余りにも便利すぎるものに、人はリアリティーを感じなくなるのかも知れない。

(中略)

我々の生活の背後には、科学の理屈があるのだが、ほとんどの人はそれを忘れていく。しかし、忘れていくのは一般の人ばかりではなく、^④科学者本人もそうらしいのである。一九世紀の科学者は、実験道具はたいがい全部、自分で作った。道具が働く理屈がわからなければ、道具は作れないわけだから、一九世紀の科学者は自分のデータが、どのようなプロセスで得られたかをよく知っていた。

一方、今日の科学者は複雑な機械を沢山使うが、自分が使う機械を自分で作っている人はほとんどいない。のみならず、大方の科学者は、機械がどのようなプロセスでデータを取るかについても、必ずしも明晰めいせきであるとは限らない。マニュアルに従つて、サンプルを入れれば、機械は勝手にデータを出す。まともな科学者は、機械が働くおまかな理屈ぐらゐは知っているのであるが、理屈を知らなくとも、マニュアル通りにやればデータは出るわけだから、理屈を知っている必要は必ずしもない。そうなると、データは研究者が取つたのか、機械が取つたのか、その所がすでにしてあいまいになる。機械の精度を含めた性能は、機械を作つたメーカーの技術力に依存している。よいデータを

出したのは研究者か、メーカーの技術屋か。実の所はよくわからない。

よいデータを取るためにはよい機械が要る。当然のことだが、性能の良い機械は価格も高い。研究費が沢山あれば性能の良い機械が買える。データは研究費のおかげか、研究者のせいか。ますますわからなくなる。筑波にある加速器は、運転代などで毎年一〇〇億円近くのお金がかかるらしい。素粒子論のデータはいったい誰が出したのか。ごく素直に考えれば、それは税金が出したのであろう。それで名声を得るのは、もちろん納税者ではなく国民の税金を湯水のように使った研究者であらう。オレの税金を返せ、と納税者が言わないほうが不思議な気がする。

そもそも最近の科学は、どうやら完全にデータを取るための技術にディペンデしているようだ。たとえば、DNAの塩基配列を簡単に決定できるようになったのは、PCR（ポリメラーゼ連鎖反応法）という技法が開発されたおかげである。ヒトゲノムの三二億もある塩基対の配列がほぼ解読できたのも、PCRがあればこそなのだ。昔は技術は科学が産み出したものであった。今や、完全に科学の成果は新しい技術が産み出すものになった。しかも、技術が完璧であればある程、研究者は技術が働く理屈を知らなくとも、正確なデータを得ることができるのである。対象に対するリアリティーが薄くなってくるのは否めない。

これからも益々、金がかかる精巧な技術が開発されてくるだろう。それにつれて、人々は科学者自身も含め、データ以前の直接的な対象に対するリアリティーを①ソウシツしてくるに違いない。②はたしてこれは、科学の進歩なのだろうか。それとも黄昏なのだろうか。

（池田清彦『やぶにらみ科学論』による）

（注1）白川英樹：二〇〇〇年にノーベル化学賞を受賞した科学者。

（注2）湯川秀樹：一九四九年にノーベル物理学賞を受賞した科学者。

（注3）朝永振一郎：一九六五年にノーベル物理学賞を受賞した科学者。

問 1
——線部㉑㉒のカタカナを漢字に直せ。

問 2
——線部①「白川英樹氏の講演会」について、次の(1)・(2)の問いに答えよ。

(1) 「白川英樹氏の講演会」の話題から、筆者は昔の学生についてどのように述べているか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 昔の学生は、科学者の講演よりもタレントの講演に魅力を感じていても、それを隠そうとしていた。
- イ 昔の学生は、最先端の科学の理論が理解できなかったので、科学者に対して激しい恐怖を抱いていた。
- ウ 昔の学生は、偉い科学者の講演は理解できないとわかっており、理解したふりをする者をさげすんだ。
- エ 昔の学生は、学生同士の競争意識が強く、有名な科学者の講演にもぐり込んででも話を聴こうとした。
- オ 昔の学生は、有名な科学者を知らないような学生を、不勉強で恥ずべき者だとみなす傾向にあった。

(2) 「白川英樹氏の講演会」を話題に挙げた筆者の意図について説明した次の文章のⅠⅡⅢに、それぞれ本文の(中略)より前の部分から、指定された字数で適当な言葉を抜き出して埋め、説明を完成させよ。

今の学生にとっては、白川英樹氏のような有名な科学者もⅠⅡ字の存在ではないので、講演会に足を運んで生身で見たいと思う者もあまりいないが、昔の学生はそうではなく、あわよくば自分も科学者や教養人になってほめられたいという思いから偉い学者の講演を聴きに行った。

そういった気どった思いは、昔の学生たちを最終的にはⅡⅢ五字へと導くことになっていた。筆者はそれをⅢⅣ八字と呼んでおり、それが科学と人々をつなぎ、科学のリアリティーを保証していたということを示そうという意図。

問3 本文中のⅠⅡⅢに当てはまる言葉として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 海千山千

イ 栄枯盛衰

ウ 驚天動地

エ 快刀乱麻

オ 換骨奪胎

問 4

——線部②「私たちの世代」、——線部③「私よりずっと年下の若者たち」とあるが、これらについて説明した次の文章の i j iii を指示に従って埋め、説明を完成させよ。

「私たちの世代」は i 五字で抜き出し を実感しているので、一般の人も ii 二十字以内で考えるという形で科学のリアリティーを感じられた。

それに対して、「私よりずっと年下の若者たち」の世代は i の実感がなく、ものごころついた時から iii 二十字以内で考えるので、科学にリアリティーを感じなくなった。

問 5

——線部④「科学者本人もそうらしいのである」とあるが、科学者が科学の理屈を忘れているのは、科学においてどのような変化が起きたためか。その変化について述べている連続した二文を本文中から探し、最初の五字を抜き出して答えよ。

問 6

——線部⑤「はたしてこれは、科学の進歩なのだろうか。それとも黄昏なのだろうか」とあるが、科学の「黄昏」とはどういうことか。わかりやすく説明せよ。

二

次は、井伏鱒二の小説、『夜ふけと梅の花』の一節である。この文章を読んで、後の問いに答えよ。

二月二十日午前二時頃、「私」が白い梅の花を見ているときに、何の脈絡もないにも関わらず、「私」は、顔面傷だらけでタチの悪い酔っぱらいの男に絡まれた。酒に酔ったトラブルが原因の傷では勤め先で叱られて困るなど言つて絡んでくるので、やむをえず、「私」は電車の事故で出来た傷だとする言い訳を考えてやった。すると男は「私」に五円札（現在の約一万円に相当する）を握らせた。「私」は、金はほしいが、これ以上の関わり合いを避けるために、受け取りをためらつた。しかし、男は暴力を振るつてでも五円札を渡そうとしてくるので、「私」はたまらなくなり、「君の傷の弁護も兼ねて、この五円で菓子折を買つて明日見舞いに行く」とやむをえず約束し、男の住所と氏名「村山十吉」を聞き出して、五円札を受け取つた。その言葉を聞き、「村山十吉」は、満足そうに帰つて行つた。

翌朝早く、まだ私が寝ている時、私は学生時代の友人田和安夫という山叶商会の相場屋に勤めている男の訪問を受けた。① 彼は、二三日前うまく当てたので私に御馳走をしようと云つて、顔を洗うのももどかしく急きたてて私を外に連れ出した。

「ぼろいことがあつてね、ひとつおごるよ」

そして神楽坂の紅谷へ行つて、彼は私にいろいろ御馳走してくれた。

彼は月に二三回私のところに来て、主として相場の変動のことについて饒舌るのが常であつた。そして私のように日雇い校正係で方々の印刷屋を廻つては、彼の言うには、

「そんな便利左官のような暮しをしては駄目だぞ。もつとも職業は何でもいいが、気持がじじむさくなつては駄目だぞ。未来に突入するんだ。明るくなれ明るく！」

或る時の如きは、紅絹の裏のついた女の羽織を何処からか持つて来て、彼はその裏を出して、私の部屋の帽子掛けにかけた。そうすれば、少くも気持が明るくなるだろうというのであつた。

「そう言ったって、明るくなれと言ったって、そんなに急に明るくなれるものじゃないよ」

「きみは、世の中から脅迫されてるぞ。俺がひとつ たましい 霊を入れ換えてやる。明るくなれよ。明るく」

けれど常に彼は私を明るくすることに成功しなかった。

紅谷を出ると、彼と私は、私のところに帰って来て夜になるまで話した。それ故、私は前夜の村山十吉を約束通り訪ねることをしなかった。そして田和安夫が夕刊を読んでる間に、^② 私は村山十吉なるものに速達の手紙を書いた。

昨夜は失礼、君の負傷が気になるので今朝訪ねて行くつもりでしたが、突然友人がやって来て ^① 火急用件が出来たので、不意ながらも手紙をもってお見舞い申します。なにしろ此の頃は相場の変動がはげしいので、友人と今も種々話をしていたところです。 ^③ 何卒 なにとぞ 悪しからず。昨夜の事件については、大体車掌が悪かったようです。第一、君がひどく酔っていたにもかかわらず、車掌が不注意だったのが大きな手ぬかりでした。電車がカアブする前に、鳥渡 ちゅうと くらい君に注意すべきが至当です。しかし君はそのとき ふところ 懐手をして昇降口に立って風にふかれていました。そして電車が急にカアブして、君が頭を下にして落ちると、運の悪い時には悪いもので、下の敷石は工事のため掘り返されていた。君は頬と唇にあんな傷を受けなければならなかった。僕は周章 あわ して電車を降りて、君を介抱したり、君の住所番地をたずねたりした。それにしても、あの車掌くらい不人情なやつはない。君が死ぬほど石にぶつ突かっても、電車を停 と めようともしなかった。ここに最もおそれるのは、君の傷が化膿 かのう しないかどうかということです。用心堅固にして一日も早く全快されるようお祈りします。実は明日にでもお伺いしなければならぬのですが、前に言う如く、なにしろ相場のことなぞで友人との話もあつたり其 そ の他忙しいこともあるので、暫 しばら く失礼しなければなりません。悪く思わないで下さい。そのうち少しでも暇になり次第、必ずお見舞いにあがります。ともかく早く全快されますよう、これだけは本当の意味で申しあげます。

二月二十一日夜

村山十吉様

私の住所や名前は記入しなかった。全くのところ、煙草、封筒、下駄の齒入れ、夕食代で、昨夜の五円はよほど費い込まれていて、この場合、思うようにはならなかった。そして盗みをしたであろうよりも以上に、五円札のことや菓子折のことが気がかりになった。私は子供のとき、仏壇の賽銭を盗んで魚釣針を買ったことがあるが、これほどまでは気にもしないでいられたのである。

それから五六箇月すぎた。

毎月二十六日になると、私はその月の給料をもらうので少し金銭を得ることが出来るのである。そこで二十六日に、早速、私は机の上の筆立てに⑦なるべく新しい五円紙幣を一枚入れ、いつなんどきでも村山十吉に返却できる用意をしておいた。それ故、私の心は五円金銭のために乱れはしなくなったので、したがってそれを彼に返却したり彼を訪問したりしなくても平気な気持であったのだ。

だが私は常に金銭を身につけてはいらなかった。毎月十日になると、⑧前々月の米塩の支払いをさせられて、二十六日の午後までの十六日間は、電車へ乗るにも乗車賃のことでびくびくしなければならなかったほどで、結局、村山十吉に返済すべく積立てた筆立ての五円に手をつける羽目になるのである。

——私はかれこれ一年間ばかり、⑨筆立てに紙幣を入れたり、またとり出して費ったりして、入れて置いている時には何等責めを感じないが、ちよつと拝借している間はいつ村山十吉に出逢いはしないだろうかと気にかけた。彼がいきなり背後から私の首すじを締めつけるかも知らなかった。

そんなに心配ならば、村山十吉なる者へ五円の金を払ってしまえばよいではないか。けれど私達のような暮しをしている者には、払える性質の借金と払えない性質の借金との、同じ金高でも二様の性質の借金があるのである。そして村山十吉に対する場合のものは、⑩明らかに後者の性質を帯びたところのものであった。しかし払ってしまわなければ、何時までも気になる性質をとまなつていた。

⑪就中、村山十吉は狂暴な男らしい。決して油断はならないのである。彼は突然ものかげからおどり出て、私の前に立ちふさがるかも知からない……

「もし、もし、きみ！ 僕の顔は血だらけではないかね！」

弁天町の邸宅の塀が現われて、その塀の上に白い梅の花がさしかかる。彼は私を捉えてどうしても放さない。私は何時でも彼に支払いの出来るようにしておく筈であった。けれど、今は五円という金を持っていない……そういう妄想が、屢々暗い夜路を歩いている時の私の襟すじに凍りついた。

今年もまた梅が咲き、すでに昨今では散りはじめた。弁天町の邸宅の高い塀の上に枝をさしかわした古木もよく咲いた。

私は給料日にはなく、筆立ての五円より他にはもはや湯銭もなくなった日に、村山十吉を訪ねることに決心した。④梅の花さえも、私が五円をごまかしたことを摘発するようであったからである。村山十吉は必ず梅の木の下でよるめいているに違いなかった。そして血だらけの手でもって私の頬を撫で、または喉を締めつけるかもしれない、飯田橋の辻便所の中では、或る夜、私はそうされたようにさえ感じた。また、その記事が、極く小さい字で最近の新聞に出ていたようにも思われて来た。

村山十吉の家、鶴巻町三十七番地、石川方は直ぐに知れた。石川質店というのがそれである。番頭だと彼が称したのは、彼はこの質屋の番頭であつたらしい。

「……………」

「質屋」と染めぬいてある暖簾をくぐる瞬間、これを訪ねるには都合がいいことに私は気がついた。マントでも質入れに来たように見せかけて、去年の手紙の通り簡単に嘘の弁解をして、五円を返済すればいいわけだ。そして彼が、私のマントの脱ぎっぷりに感心するような悪趣味でもあれば、これは十円位で入質させてくれるかもわからない。私は去年のままのマントを着ていたのである。

「こんにちは」

と言いながらマントを脱いだ。

「これを入りたいんだがね」

しかし、その帳場には村山十吉はいなかった。四十歳くらいの肥った男がいた。彼は質物らしい旧式のカメラで、机の上の椿の花を撮影していた。

彼は尊大な仕草でもって私のマントを受取ると、裏返しにしてみたり長さを計ってみたりして、終には、襟の後

ろや裾すそのきれいているところが如何いかにも気になるという風に首をかしげた。

「おはじめてですか？」

「はじめてです」

私わたしは印形いんぎょうを出した。

「おいくらほど？」

「十円」

「十円？ さあ、そんなには出ませんよ」

「流さないから大丈夫だ」

「でも、斯こんなに裾や襟がきれいでいますからね。そして、これあ出来合こいでしょう？ 背中も色が変わっていますね。どうも綿わたメルトン（注）は持ちが悪いですな」

彼は、両方の耳に綿をつめていた。そのため私は少し彼をあなどる気持になった。

「入いれてしまうまでは僕のものだから、マントの悪口を言うのは止よしたまえ」

「でも十円はね」

「それに僕は、番頭の村山十吉とも懇意こんいなんだからね、十円」

「あいつは、とつくに居いなくなりましたよ」

「居いないんですか、何ど処こに居います」

「何処どこに居いるかわかるものですか。あいつのことだから、また散々さんざんなことをやっているでしょうよ」

そして私は村山十吉が、去年私と出で会あした夜は家に帰かえらなかったことや、そのまま仕入れ物の買かい入いれ金かねを持って失踪しゆうそうしたことを知しった。結局、私はマントに時計を添そえて十円を借りることができた。

もはや何どんなことがあっても、私は村山十吉がおそろしくはないと思おもった。③ 彼は私以上にはつきりした罪人ざいじんでさ

えあるのだ。全く私こそぼろいことがあつたわけである。私は神楽坂の紅谷へ行って、山叶商会の田和安夫に電話でんわをかけた。けれど彼は留守であつた。若もし彼が居いたならば呼よび出して、④ 彼が常じょうに私へ吹聴ふいちやうしていたように、二三日前

ぼろいことがあつたから御馳走ごちそうしたいと申し込んでやろうという魂胆こんたんなのであつた。

(注1) 相場屋…投機目的で不動産や通貨や債券などの売買を行う部門。なお、「山叶商会」は証券会社である。

(注2) ぼろい…元手や労力の割に、利益が非常に多い。

(注3) 神楽坂…東京都新宿区の地名。また、「弁天町」、「飯田橋」、「鶴巻町」もこの周辺の地名である。

(注4) 左官…建物の壁や床、土塀^{どべい}などを塗り上げる仕事をする人。

(注5) 紅絹…絹織物の一種。真赤に無地染めにした薄地の平絹。

(注6) 辻便所…公衆便所を指す。

(注7) 印形…印章。はんこ。

(注8) 綿メルトン…防寒用服地として用いられる毛織物の一種。

問1 線部a「火急」、b「何卒」、c「就中」と最も意味が近い言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

a 火急

オ エ ウ イ ア
だしぬけの たかぶるような さしせまった あぶなげな きびしげな

b 何卒

オ エ ウ イ ア
どうか どうにも どうやら どうも どうしても

c 就中

オ エ ウ イ ア
なまじ いささか およそ おそらく とりわけ

問2

——線部①「彼は、二三日前うまく当てたので私に御馳走をしようと言って、顔を洗うのもどかしく急ぎたてて私を外に連れ出した」とあるが、「田和安夫」はなぜこのようなことをするのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 需要があつて苦勞に見合つた十分な収入を得られる一方で、世間体は良くない仕事をする生活のせいで、「私」が屈折した気持ちにならないように、「私」の仕事をほめて、気分よくさせようと思つたから。

イ 都合良く使われるばかりで苦勞するわりに、十分な収入も名声も得られない仕事をする生活のせいで、「私」が活気なく沈んだ気持ちにならないように、景気よくおごつて、元気づけようと思つたから。

ウ 皆に重宝されやりがいは十分にあるが、収入は十分ではない仕事をする生活のせいで、「私」が金の余裕がないために心が乱れないように、金銭面で援助して、心の余裕を持たせようと思つたから。

エ 収入は高いが、職人のような高い技術が求められる仕事をする生活のせいで、「私」が修業に時間をとられて、あくせく生きることにならないように、外に連れ出して、気分転換してもらおうと思つたから。

オ 上司には逆らえずに気疲れするだけでなく、若いうちは収入が悪い仕事をする生活のせいで、「私」が働くこと自体が嫌にならないように、他の仕事に目を向けて、前向きに生きてほしいと思つたから。

問3

——線部②「私は村山十吉なるものに速達の手紙を書いた」とあるが、この手紙からどのようなことが分かるか。**適当でないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 「私」は、見舞いに行くと言明してしまったために、速達を出して約束の一部を果たさそうとした。
- イ 「私」は、投資ができるほどの裕福な暮らしをしている人物であるかのように、自分を見せかけた。
- ウ 「私」は、不親切な車掌のせいできた「村山十吉」の怪我けがの具合を、心の底から心配している。
- エ 「私」は、金の件には触れず、用事が立て込んでいるために直接見舞いにいけないと弁解している。
- オ 「私」は、「村山十吉」となるべく関わりたくないのに、自分の住所や名前を手紙に記さなかった。

……線部㉞㉟とあるが、それぞれの説明として正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

㉞ 「私」が「なるべく新しい五円紙幣」を選んでいるのは、見ず知らずの「私」にすら施しをするほど、人間的に秀でている「村山十吉」に金を返す際に、失礼がないようにするためである。

㉟ 「前々月の米塩の支払いをさせられて」という表現は、「私」が「村山十吉」に是が非でも金を返したい気持ちがあるのに、それを妨げる貧乏な生活を強いる社会に対する「私」の憤りの表れである。

㊱ 五円紙幣を入れる物として、校正仕事に深い関わりのある「筆立て」を「私」が選んだのは、自分としては誇りに思っている仕事で稼いだ金で「村山十吉」に誠意を伝えたいと思っているからである。

㊲ 「後者の性質」とは「払えない性質」のことで、十分な稼ぎがなく貧困にあえいでいる「私」にとって、五円はあまりにも高額であるため払えないということを表現している。

㊳ 「梅の花」を見ても、和やかな気持ちになるところか、自分はひどい制裁を受けるべき悪人だと思っただけ、
「私」は言い訳を重ねて筋を通さないまま過ごすことに耐えられなくなっている。

問5

——線部③「彼は私以上にはつきりした罪人でさえあるのだ」とあるが、どういふことか。「私」と「村山十吉」の違いを明らかにして、わかりやすく説明せよ。

問6

——線部④「彼が常に私へ吹聴していたように、二三日前ぼろいことがあつたから御馳走したいと申し込んでやろうという魂胆なのであつた」とあるが、「私」はなぜこのように考えたのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 「田和安夫」が「私」の暮らしぶりを心配して支援してくれることを快く思えないほど「私」は心が荒んでいたが、「村山十吉」の恐怖を克服したことで人間的に成長でき、心の余裕も生まれて今までの自分の悪態を反省したことを、人間的に秀でている「田和安夫」になりきって伝えようと思つたから。

イ 日々莫大な利益をあげる「田和安夫」が貧しい自分を氣遣つて支援してくれることに「私」はありがたく申し訳ないと思つていたが、「村山十吉」の件で十円の金の余裕ができたことで、「田和安夫」に恩返しができる状況になり、日頃の感謝が伝わるように彼の言葉で恩返しを申し入れようと思つたから。

ウ 仕事や金銭に対する価値観の相違から、「私」は「田和安夫」に対して良い印象を抱いていなかったが、「村山十吉」から五円を手に入れたことを通じて不労所得の魅力に気付き、「田和安夫」の価値観が理解できた喜びを、日頃の彼の態度をまねることで伝えようと思ったから。

エ 「田和安夫」の支援は恩着せがましい行為だとして「私」は日頃から不快感を覚えていたが、「村山十吉」の恐怖から脱したばかりか、五円の得までもしたことで調子付いて、これを機におごり返して、「田和安夫」に恩を売られる側の不快感をそのまま味わわせて反省を促そうと思ったから。

オ 「田和安夫」がろくに苦勞もせずの良い暮らしをして偉ぶっていることに「私」は良い思いを抱いていなかったが、「村山十吉」の恐怖から解放された上に、五円の不労所得も得られたことで気が大きくなり、「田和安夫」が日頃してくることをそのままやり返して、彼を見返そうと思ったから。

問7 井伏鱒二の作品を次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 高瀬舟 イ 蜘蛛の糸 ウ 走れメロス エ 山椒魚 オ 三四郎

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

むかし、^(注1)左兵衛の督^(注2)なりける在原^(注3)の行平^(注4)といふありけり。その人の家によき酒ありと聞きて、^(注5)上にありける左中弁^(注6)藤原の良近^(注7)といふをなむ、^(注8)まらうどぎねにて、その日はあるじまうけしたりける。① ^(注9)なさけある人にて、かめに花をさせり。その花のなかに、② ^(注10)あやしき藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸ばかりなむありける。それを題にてよむ。よみはてがたに、③ ^(注11)あるじのはらからなる、あるじしたまふと聞きて来たりければ、④ ^(注12)とらへてよませける。もとより歌のことはしらざりければ、⑤ ^(注13)すまひけれど、しひてよませければかくなむ、

咲く花の下^(注14)にかくる人^(注15)を多みありしにまさる藤^(注16)のかげかも

⑥ ^(注17)「なかくしもよむ」といひければ、「おほきおとどの栄花^(注18)のさかりに^(注19)みまそがりて、藤^(注20)氏の、ことに栄ゆるを思ひてよめる」となむいひける。⑦ ^(注21)みな人、そしらずなりにけり。

〔伊勢物語〕百一による

(注1・3) 左兵衛、左中弁…ともに官職名の一。

(注2) 上にありける…「殿上^(注22)の間に^(注23)出仕していた」の意。なお、殿上^(注24)の間とは、上流貴族のみが出仕を許された場所である。

(注4) まらうどぎね…主賓。しゅひん

(注5) あるじまうけ…おもてなしの宴。うたげ

(注6) 人を多み…人が多いので。

(注7) おほきおとど…太政大臣。たじょうだいじん 藤原良房をさす。ふじわらのよしふさ

(注8) みまそがりて…いらつしやつて。

問1 ——— 線部①「なさけある人」とあるが、どういふことか。最も適當なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 行平が情趣を解する人だということ
- イ 行平が直情的な人だということ
- ウ 行平が情にもろい人だということ
- エ 良近が感情的な人だということ
- オ 良近が人情にあつい人だということ
- カ 良近が風情を好む人だということ

問2

——線部②「あやしき」とは「奇異な」といった意味であるが、どのように奇異なのか。わかりやすく説明せよ。

問3

——線部③「あるじのはらから」とは「主人の兄弟」という意味であるが、この人物は高名な人物である。その名を次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 時平ときひら

イ 業平なりひら

ウ 道真みちざね

エ 道長みちなが

オ 頼通よりなご

問 4 ——— 線部④ 「とらへて」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 「あるじのはらから」を賞賛している。
- イ 「あるじのはらから」の遅刻をとがめている。
- ウ 「あるじのはらから」を逃がさぬようにしている。
- エ 「藤の花」を注視している。
- オ 「藤の花」を手に取っている。

問 5 ——— 線部⑤ 「すまひけれど」を口語訳せよ。

問 6

——線部⑥「などかくしもよむ」とは、周囲の人物のどのような気持ちを表したのか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 歌が盗作であることを疑っている。

イ 歌に裏の意味まで読み込まれていることに感服している。

ウ 歌の真意をはかりかねている。

エ 歌が表す状況のありえなさを指摘している。

オ 心情を包み隠さず歌をよむべきだと言っている。

問 7

——線部⑦「みな人、そしらずなりにけり」とあるが、そうなのはなぜか。わかりやすく説明せよ。